

特251

352

1311

464

本多日生述

真理の基礎に樹つ佛教の信仰

法財
人團
統

一

團

始



特 251
464

仰信の教佛つ樹に礎基の理真



眞理の基礎に樹つ佛教の信仰

故大僧正 本 多 日 生

目 次

- 一、眞理と宗教
- 二、釋尊の大覺
- 三、法華經の特色
- 四、聖人遺訓の要旨
- 五、宇宙觀の眞理
- 六、人身觀の眞理
- 七、佛身觀の眞理
- 八、結 論

一、眞理と宗教

宗教は眞理とどういふ關係を有つかと申しますと、西洋一般の思想では宗教は眞理でなくとも宜しい、智慧の方から十分に研究をして行くと判らんことになつてしまふかも知れんけれども、併し宗教情操があつて『有難い』といふことを満足せしめて行くなれば、其

の人も幸福であり其の中からいろ／＼善い事が起つて来るからして、眞理に於て認め得ないとしても宗教といふものは大事なものである。故に宗教は感情である、情操であるといふ風に考へて、餘り眞理に重きを置かないで宗教といふものは存立して行くように考へた人が多いのである。それは根本に於て、西洋の文明には希臘の思想とヘブライの思想といふものが對立的になつて居つて、ヘブライの方に起つた基督教は最初から、左様に眞理といふ觀念を重きに置いて居なかつた、吾々の直覺と申して『神様は在るものだ』『神様は有難い』といふ感情的に來る思想が本になつて、さうして基督のやうな熱烈なる宗教的人を得て此の基督教といふものは弘まつたので、基督その人も學者でもなければ眞理の研究に従事したこともない、彼は一個の大王の子であつたのである。それが熱心なるさういふ宗教氣分の漲つた人であつて、或る時『自分は神様から偉大なる使命を帯びて居る』といふ事を直覺して、それから宗教に伴ふ弊害の改善を叫んで、殊にお祭りのやうなことをして、寺に於て五厘の蠟燭を三錢にも賣る、一錢の花を五錢にも賣るといふやうなことが

宗教に附隨して非常に盛んにあつたからして、世間でも左様な暴利を取ることは不正であるのに、神様の前に居る僧俗が一番高い蠟燭を賣つて居る、さういふ都合な事はいかんといふやうなことに非常に熱心に感激して、さうして神の祭りに就ての弊害を改革し、段段さういふ熱烈な宗教的の運動に進んで行つて基督教といふものが出來た。さうして基督の働いた年限は僅か三年にして、磔になつて死んだのであるが、さういふ風なことが出發點で、それが又人心に非常な感化を與へて、歐羅巴、亞米利加は今日先づ大體基督教の勢力になつて居るものであるから、宗教といふものは左様に眞理に重きを置くものではない唯だ『有難い』とかいふ所謂熱といふものがあつてやつて行きさへすればそれで効果があらるものだといふ感じが、非常に廣い範圍に行はれて居るのである。一方には希臘の方に起つた哲學の思想は、何もかも一切は眞理に根柢を置かなければならぬ、さういふ眞理に反したやうな事柄は、一時は宜いようでも結局値打の無いものであるといふことから、哲學となり科學となりして非常に進んで來たものである。その知識の文明と宗教の信仰的の思

想といふものが、どこ迄も調和されぬ、今日でも本當にその調和は出来得ないといふのは、私共から考へては兩方に缺陷があるやうに思はれる。

宗教が餘りに熱の方だけを考へて眞理を輕んじて居つた思想が強い、哲學の方は又冷やかな原理、原則といふことのみ考へて、人間の魂とか神様とかいふやうなことは輕く考へて來た、遂には科學の思想に入つて精神の問題や神の問題は全然無視して進んで來る、唯物的文明に押寄せて來るやうな其處に素地があつたと思はれるのである。宗教の方は非常に盛んになつて居るやうだけれども、根柢に於ては眞理を輕んじた意味合が今に脱けない、希臘から起つた思想は冷やかな方面から精神の問題や神の問題を輕んじた傾きが脱けないで、今尙ほ來て居るものである。それ故に廣く世界的の思想といふと非常に廣いやうだけれども、さういふ色彩を帯びた思想が世界的と言はれて居る。これは私は宗教と判斷する所の標準とはならないと思ふ、範圍は廣いやうであるけれども、それは宗教と眞理との關係を左様に見た一つの例であつて、それが手本ではなからうと考へるのであります。

西洋では餘程えらい人でも眞理と宗教は二分して考へて宜いやうに思ふて來たので、今より二百年ほど以前に出たカントといふ獨逸の大哲學者があります、これが西洋の哲學者中に於ては前にも後にも先づこの位えらい人はなからうと言はれて居るが、その人がやはり物を判斷するのに、理性の尺度と實際の尺度といふ二つを立て、理性の尺度から見れば基督教でいふ神様といふやうなものは在るか無いか疑はしいものだけれども、實際の尺度からは之れを在るとして置いた方が萬事に宜しい、斯ういふやうな二つの尺度を立て、さうして物を判斷して行く。哲學者の方は眞理の尺度を重んずれば、宗教といふものを信じない方に行くし、實際の尺度を重んずる宗教家は、哲學を輕んじてその信念を續けて行くといふやうな工合で、どこ迄も二つに分れて來たのである。

今日の西洋の文明も、要するに知識と信仰との一致を缺いて來た爲めに、知識の方で進んで行く時には斯様に紛争の世界を造り、暗黒の世界を造るに至つて「今の知識は危ないものぢや」と人が思ふやうになり、又宗教が盛んな時分にも非常な危ない時代を現出して

所謂中世の暗黒時代といふのは宗教の全盛期に於て非常な罪惡が行はれたのである。羅馬法王がお札を無闇に賣出した、それは日本のお札のやうな安いものではないのであつて一枚のお札が五萬圓も十萬圓もするやうなお札を賣るのである。そのかはりそのお札は日本のお札のやうに効いたか効かんかわからぬやうなものではなくして、そのお札を持つて居つたならば、人を殺して裁判所に行つて死刑の判決を受けても、愈々の時分にそのお札を出して、「私は法王さまから斯様なお札を戴いて居る位の善人でありませう」と言つたならば、裁判所の判決といふものも皆無効になつてしまふといふ位にお札に力を與へて居る。だから悪い奴ほど高い錢を出してお札を買つて居る。巡査が捕まへても「私はお札を持つて居ります」と言つて出して見せれば許して呉れる、さういふ惡魔や災禍の神に效くお札でなくして、巡査や裁判官に效くお札を賣つたのであります。左様に西洋では、宗教が勢力を得た時分に於ては暗黒の時代を現出した、それに懲々してその反動として知識の文化が今日に押寄せて來た。その知識の文化の進み行いて落つく所が今のやうに社會が變なこ

とになり、學問はしたけれども人格はこわれる、冷かな人間になつて、この儘では到底いくまい、文明は行詰つたと言はれるやうになつたのは、何故さうなるかといふと、その根源の頭が二つに分れて居つて、知識は冷酷であるし、信仰は感情的であつたといふことの禍が、永い二千年以上の西洋の文明に禍ひして居るものであらうと私は考へるのである。そこで西洋は決して侮蔑すべきものではないけれども、手本ではない、何も頭から水をぶつかける必要は無いけれども、西洋大明神と言つて拜まんならん必要もない、吾々の適當の參考に供すればそれで足りる譯だと思ふのである。

左様な譯であるからして、西洋で考へた所の眞理と宗教の關係といふものは手本にはならない。この兩者の關係が離れて居る爲めに、宗教が盛んになれば暗黒となり、學問が盛んになれば争鬭紛亂の世界を現出する次第であると思ふ。

所が佛教はどういふ關係に置かれたかといふと、全然そこが違つて居るのであつて、深い眞理と宗教との融合接觸を重んじて、教即ち眞理であるといふ程に考へて來た、即ち

理教の關係と申して、眞理と教との關係は全然離れるものでない、どういふ譯で離れないかと言へば、佛様の正覺を通してこれが結合するのである。佛の正覺とは上に眞理を悟り下に教を垂れたる時は、その教が眞理に背かぬやうに、この眞理と教とを結合する力は佛の大覺の智慧、これが之れを融合して居る所のものであるといふ事に於て、その意味を徹底的に説明した。それがどういふ言葉に現はれて來るかといふと、佛敎では「法」といふ言葉が非常に重いことになつて居る、三寶の中にも「法寶」といふものがある位で、教ではあるけれども唯だ言葉といふ意味ではない、それには眞理があるからして、妙法といふ言葉が法華經にもこのつて居る程、この眞理を尊重して居るものである。基督敎ではさういふ言葉はない、「神」「神」といふのみで「法」といふ言葉は出て來ない、佛敎の方では「佛法」といふ位に、佛を尊んでも直ぐそこに法がある、佛法信者は佛を信するばかりでなく佛の示されたる法を守らなければならぬといふ、その法の觀念といふものが非常に強くあるのである、法即ちそれが眞理である。眞理といふものを除外して唯だ盲滅法に

「有難い〜」といふ風にして進んで來た宗教とは違ふのであります。その意味を十分味はうて、眞理としても完全な信仰でなければならぬといふことを今後は明かにして進んで行かなければ、最善の信仰とは言はれないといふ事をお話して見たいと思ふのであります。

二、釋尊の大覺

就ては釋尊の正覺の内容といふものを考へて見なければならぬので、唯今も申した佛がお悟りなされたといふことは何を悟られたか、宇宙的に言へば宇宙の眞理をお悟りになつたのである、又大勢の人達に就て言へば人の本質、人そのもの眞實をお悟りになつたのである。往いて言へば萬事萬端何事に於ても眞實を見通し給ふた所に、釋尊の大覺といふものはあるのである。その大きな智慧が本になつてそれから消化されて教といふものが出て來るから、こなたれた時分には非常に柔らかなわりの良いことになつて居つてもその根本には強い眞理の悟があつて、それから流れて來るのである。恰も母のいろ〜の

食物が消化して柔らかな乳となつて現はれて来るが如くに、乳の色は白く、さうして多少の甘味があつて洵に飲みよいものであるけれども、その養分といふものはどの様なものでも、かたい牛蒡でも大根でも何でも皆母親の齒と胃袋とに依つて消化されて、さうして飲みよき乳となつて出て居るものであるから、同じ智慧でも眞理の滋養分に於て少しも缺けて居ない所の知識が、佛教の教となつて現はれて居る。それが天理教だとか基督教は、同じ知識のやうに見えるけれども、一合三錢の牛乳と一合二十錢の牛乳とは違ふやうな譯であつて、その養分に於て佛教といふものは特別な貴さを有つ、上等飛切の乳みたやうなものだといふ意味を佛教徒は誇りとして、自分の觀念の裡に置いてかゝらなければならぬものである。

それは前にも申した基督の傳を見ても能く判かることである、基督は熱烈なる宗教家ではあるけれども、彼は悟つたといふやうな意味は何も無いのである、唯だ熱心に働いた人で宗教的熱情に富んだ人ではあるけれども、知識の側に於ては哲學者には遠く及ばない人である。

である。釋迦如來は宗教の情操としての慈悲を有ち、愛を有ち、救ひの力を與へられる點に於ても敢て基督に劣るべき者ではないが、更に眞理の方に於ては比較にならん程基督とはその趣きを異にした偉らうである。根本の本佛といふ事から考へれば勿論問題はないことだけれども、假に之れを悉達太子として人間の經歷を経られた上から考へても、一方は大工の子である、一方は國王の子悉達太子であつて、さうして非常な秀才である、殊に研究に没頭せられた位の人で、あらゆる印度の深遠なる哲學、宗教、その他の思想といふものを研究して大變に知識の方が進歩して居つて、最後に大覺を成就せられた。その正覺の内容には、宇宙の眞理はもとより一切の事柄の眞實を見通した所に佛の正覺といふものはある。だから大覺者といふこの「覺」といふ字は、無論眞理を含んで居る言葉である。悟つたといふ事は眞理が我が所有になつたといふことを意味するものである。佛とは智者覺者といふ位である。覺といふ字は一方には知識を意味するといふことは申す迄もないことである。基督教の方では基督の人格の中に智慧の誇りといふものはないのである、それ

であるから西洋でさういふ智慧のえらい人を擧げるといへば、哲學者を擧げて來ることになる、カントがえらいとか、或はヘーゲルがえらいとか、アリストートルとか、ソクラテスとかいふ人を擧げて來る。東洋では宗教家としての偉人は無論お釋迦さまであるけれども、同時に哲學者として誰を擧げるかと言つたならば、哲學者の卓越したものはやはり釋迦牟尼であるといふことになる譯である、一人で兩方を兼備へた非常なえらい方である。斯様な大きな覺になると、一つの頭で智慧もあり慈悲もあり、宗教の方面も哲學の方面も總てを含んで居るといふことになるので、一個の大きな頭といふものが非常な尊いものになる。それから流れて出て來る教であるから、智慧といふものは、小さな智慧を幾つ寄せても、さういふ大きな一つの頭は出來ないのである。釋迦如來がお生れになる以前に人類が何億何億生れて居つたか分らんけれども、釋迦如來の一つの頭に及ばぬ、釋迦出現以後に於て世界中に大勢の學者なり宗教家なり人物なりが出たけれども、その頭をまるきり寄せた所で釋迦如來一つの頭に及ばぬ、全人類の總ての知識、總てのものをあつめても

釋迦一つの頭に及ばぬものである。これは今日の所謂デモクラシーの思想とは正反對なるものである、一つのえらい智慧といふものは、澤山ものを寄せても中々出て來ないのである。例へば數學でもさうである、難かしい幾何學なら幾何學の難問題がそこに一つ出た、それは中學校の生徒のやうなものでも分らぬと言つたならば、日本中の中學校の生徒、小學校の生徒、及び學校に這入らぬ子供をまるきり寄せて、百年考へさせても分らぬといふ譯で、詰らぬ頭をナンボ寄せ集めても分かるものではない。さういふやうに一つの卓越したる大きな智慧を得たといふ事が非常な尊いことになつて行く、それを知らなければならぬと思ふ。

西洋が澤山の事業をやり文明を建設したけれども、最初の頭が、智慧の方に於ても宗教情操に於ても、斯様な大きな頭を一つ持たなかつたことに於て、歐米の數千年間の努力は、結局東洋に及ばぬといふ結論に到達する日が來るのである。東洋がその場合に勝利に歸するといふその原動力は、釋迦牟尼が東洋に生れ給ひしことに於てこれが決勝點に達すると

吾々は考へて居る。さうなるとこの釋迦の覺といふ事が非常なえらいもので、無論それに依つて宗教的に言へば三千年間の人達が救はれたのであるから、その事だけでも大きな事實であるけれども、まだ大きな將來に横たはつて居る所の東西文化の問題、これは文化を挾んで民族の競争といふことにもならうけれども、往いてはさうく喧嘩ばかりするといふことはなくなるだらう、まだ大きな喧嘩の幕は通らんならんけれども、終ひには左様に顔の色の違い位で喰ひばかりして居るのが人間の自分ではないといふことは了解するの日が来るに違ひない。さうなつて来た時、さうして人類の眞の平和、眞の幸福を實現しようとする時、必ずやこの釋迦牟尼の教が光を發するのである、それは釋尊の大覺の尊さから現はれる所のものであります。

丁度一昨日でありましたが、亞米利加の大學に二十年以上も教授をして佛敎を教へて居るブラットといふ博士が私を訪ねて参りまして、いろく日蓮主義のことや佛敎のことに就て質問をせられて、約三十箇條ほどの事をお話したのでありますが、その質問の如き

は實に要領を得て居ると思ふて私も敬服をしたのであります。併しその問題の中心に觸れて行く所はやはり釋迦牟尼に對する研究であります。日本の今の多くの佛敎徒のやうに、釋尊を忘れて佛敎を研究するやうな暗愚なる態度は西洋人にはないのである、又日蓮門下のやうに詰らぬ所にばかりひつかまつて居つて、釋尊に關する意識が不透明であるといふやうなことは、西洋人の眞面目に研究する人の頭からはそんな問題は皆飛んでしまつて、それこそ私共が平生熱心に力説して居る問題の事柄にのみ觸れて行くに違ひない、彼の質問に類する事は自分が平生から力強く研究して居る所であるから、自分はブラット博士に言つた。あなたのこの質問は中々困難な問題のやうだけれども、自分自身は常日頃さういふ問題に重きを置いて研究を遂げて居るから、あなたがいろく尋ねられることに就て別段答辯に苦しむやうなことはない積りである、更にモット大きく佛敎全體に就てお話を進めて見たいと思ふがと言ふと、向ふも非常に喜んで感謝をして、更に京都に於て都合がつかいたらモウ一週會ひたいといふことで別れたやうな次第であるが、どうしてもこの釋迦如

來のえらいことをもつと能く知らなければならぬ、それが本になつて一切の問題が解決されて行くのである。佛教の信仰の中心は釋尊に對する信念渴仰といふものをもつと明かにしなければならぬ、どんな佛を拜んだら利益がいゝだらうか、うまい事があるだらうかといふやうな、丁度富籤でも引くやうな積りで佛教に來るといふやうなことは、洵に情けないことである、左様なことであれば劣等な民族と言はれて然るべきことである。西洋人にもいろ／＼缺點はあるけれども、宗教の問題と言つたならば尋ねて行く筋道がちやんと定つて居る。今のブラット博士との問答に於ても私は痛快に感じたのは、『あなたのお話を伺へば釋迦牟尼が絶對の實在者である、私も左様に考へるが、併し日蓮宗のお寺に行くと、大きなお堂には日蓮聖人が祀つてある、お釋迦さまはどこかに引込んで居るやうなことになつて居るぢやないか、あれはどういふ譯であるか』といふことまで聞かれた。『それは彼等が間違ひをやつて居るのである、日蓮聖人の精神に違反したる愚なる行動に過ぎない』といふ事を答へて置きましたが、先生はそれを皆ペンで書取つて『大いに自分は参考を得

た』と言つて喜んで居つた。それから又祈禱といふものはどんな具合にやるかとか、いろいろの事を質問された、これ等の事はみな世界的に、日蓮主義が擴大して行く方から考へて置かなければならぬので、一天四海廣宣流布と口ではかり言つても、それに對する準備を以つて教義を研究せず、信仰を指導しないといふことは實に考の足らぬやり方だと私は思ふて居る。私共が平生この講壇でお話することは、左様に世界的に法華經が弘まつて行く時に、世界の宗教大家が『あなた方の信心は』と言つて試験をされた時分に皆合格をするやうにお話をして居る積りである。『さういふ信者が實際にありますか』と聞かれた場合に、『見本は此處にあります』と言つて、一人でもよい、『未だ本當の製造にかゝりませんから見本は少ししかありませんけれども、斯ういふ意味で導きさへすればみな斯うなります』といふ手本さへあればそれで宜いのである、數ばかり澤山在つて見ても、どれを見ても之れを見ても出來損ひで、こんなものは仕方がないといふやうでは何にもならな

三、法華經の特色

そこで次に考へなければならぬ事は法華經の特色といふ事である、これは有難い宗教として説かれて居るに違ひはない、信仰に依つて救はれることにもなる譯だけれども、併し唯だ有難いといふ事だけが法華經の特色ではないので、その有難い意味合に押寄せて居る所の根本に眞理を外さないで、一々の事柄が眞理の土臺の上に組立てられた所の教であるが故に法華經が尊いのである。阿彌陀經などは眞理の側に於ては多大の缺點を有つて居るが故に、「お有難い」といふ事だけから言うて感情を満足せしむるやうに見えても、一度知識に覺醒たる場合には、その信仰が直ぐに動搖をするのである。風も吹かず地震も揺らない時には非常に立派なやうに見えても、一つ風が吹けば倒れてしまふといふやうな家と、風が吹いても地震が揺つても倒れないといふ完全な建築との違ひがあるが如くに、唯だ外形が立派なばかりではない、その基礎工事が法華經は卓越して居る。その點に於て法華經

といふものは實に尊い意味を有つのである、その眞理の内容實質を詳細に調べるといふことは、自分にも知識を要するからして出来ない人もあらうけれども、さういふものだといふ事を信することだけは誰にも出来る譯である。話を聞かして貰つて眞理の意味は忘れてしまつても、他の教のやうに薄弱な基礎の上に立つて居るものではない、これは眞理の上に組立てられた尊き教であるといふ事を信することは出来る譯である、さういふ感じは有つて居らなければ、法華經に對する信仰とは言へないと思ふ。

その場合に法華經は御承知の如くに方便品の始めから佛の智慧を稱讚して起つたので「諸佛の智慧は甚深無量なり、諸法の實相は佛と佛とのみ究盡し給ふ」といふことを本にして、佛の智慧から宇宙の眞理を見通し、それから説き始めた所の教であるといふことの意味は頗る明瞭に現はれて居るのである。それはあなたの方が方便品をお讀みになる時に「諸佛智慧。甚深無量。——如來方便。知見波羅密。皆已具足。——唯佛與佛。乃能究盡。諸法實相。」と言ふて居る、その事柄は法華經の教が佛の智慧の光を明かにして、眞理の上

に打立てたものであるといふ事を極力示したものである。それが法華經の始めに方便品を讀んで居る所以であるけれども、眞理や智慧が宗教としての一番最高ではない、その眞理の上にモウ一つ建設をして有難い信仰に入らなければ吾々は救はれないから、それが自我憫の方に行つて佛様の慈悲の尊いことを現はして、吾々の信仰に依つて救はれる途が開かれて居る譯である。この二つの關係、智慧の方から眺めた眞理の教、信仰から眺めた慈悲の教といふ二つの結付きといふものが法華經にはあるのである。それで日蓮聖人は、信仰の方に於て先づ決心をきめさせたけれども、智慧を無視して進んだものではなかつたのである。淨土門などは智慧と信仰とを二分して、智慧で行く者はそつちに行け、こつちは信心だけだと言つて、智慧を敵とし眞理を敵として進んだ所に淨土門の缺點といふものはあるのである。法華經に依り日蓮主義に據る者は眞理を尊重しつゝ、分らぬのは自分が及ばんのであるけれども、教そのものは眞理に於て缺けたる所がないといふ信念を有つて居るのが、日蓮教徒の特色であると思ふ。故に法華經の左様に智慧を重んじたる側も能く

味はうて置かなければならないと思ふ。

四、聖人遺訓の要旨

それから日蓮聖人の御遺文に就て見ても、唯だ有難いといふ所から出發しては居ない、それが間違ひを起して面倒な學問に入つて、坊さんの頭が纏らないやうなことにもなつて居るが、併しそれは坊さんの頭が腑甲斐ないのである。宗教としては眞理の道程を通過して純信仰の所に熱誠を捧げなければならぬので、眞理の道程にひつかゝつて熱誠に達し得ないやうな學者といふものは、皆これはまごつき學者といふものである、そんな者は役に立たない。所がいつまで經つてもその眞理の道程にひつかゝつて、丁度東京に行かうと言つて出かけた人間が、大井川で川止に出會つた、或はやつとのことで川崎まで來たけれども旅費が無くなつてしまつて、仕方が無しにそこで土方人足になつて居る、その中に泥棒をして牢に入れられたといふやうなことで、三年經つても五年經つても遂にお江戸に入る

ことの出来ない人間と同じやうなもので、途中にひつかゝつてまご／＼してしまつて居る下らない坊主が一パイ出来たのである。早くこの眞理の道程を通過して、さうして愈々大井川が渡れんければ水の中を泳いででも早くお江戸に着かうといふ所の熱心を以つて、宗教といふものは眞理の道程を通過して來なければいかぬ。さうしないで、その眞理の道程を通過せずに單純な信仰に入らうとしたる所の人は、これ亦本當に法華經の教を弘めることは出来ないのである。婦人の方などで言ふたならば、眞理の側を餘り大切に思はない人もあるか知らんけれども、法華經は婦人だけを教へるお經ではない、總ての人類に對して如何なる地位のある者であらうが、教育のある學者であらうが、皆この眞理の下に感化しなければならぬ。感情に富んで居る婦人も、知識に富んで居る男子も、「或るほどお前はその方の側から感心して居るか、俺はこちらの側から感心して居る」と言つて、如何なる者も皆この法華經の信仰に感化するやうに教化して行かなければ、全世界を教化するといふことは出来ない。だから婦人の側から言へば、自分の知識はそこに十分に繋がりを取り得

ないにしても、法華經の特色はどんな學者でも知識のある人でも感心する教ナンであると、いふ事ぐらゐは知つて居らなければいかぬ。旦那様から小言をいはれて申譯が出来ないやうなことではいかぬ、「あなたも一つ法華經を研究なさつたならば、私はこつちの側から感心して居るけれども、あなたの知識の側に於ても私以上に敬服しなければならぬものがあります、それに私の信仰を小言を仰しやるといふのは、私があかんといふよりはあなたがあかんのです」といふ位のことば婦人として男子を教へてやらなければならぬものだと思ふ、さういふ意味が非常に大事なことである。

そこで日蓮聖人の教の有様を見ると、聖人は信仰を重んじたけれども、その爲めに知識を少しも否定しては居ない。第一自分が修養する場合に於ても虚空藏菩薩に祈るときに『日本第一の智者となし給へ』と言つて居るし、或は自ら大切な問題は悉く解決をして、知識の光を十二分に現はしたる所の人である。宗教信仰の熱烈なる方面に於ても遺憾なく活用してあるが、一方知識の光といふものを日蓮聖人は極度に輝かして居る所の偉らい人

である。それだから一切經も周覽せられ、各宗の主張をも聴き、當時横はつて居る問題は悉く聖人は之れを解決して居られる。即ち信仰と眞理とか、宗教と國家とか、或は信仰と道徳とか、これ等は實に千古の懸案とも謂はれて困難を感ずるその重大な問題に就ても悉く日蓮聖人は解決を與へられた。他の方ではその問題の善惡の決定が附て居ないのである。「佛教と國家はどういふ有様のものか」と言ふても、その問題の解決が附かぬから國を粗末にせいと言ふ譯にはいかんけれども、マアノ、自分の身支度をして行けば宜いといふ個人解脱の色彩が非常に強く現はれた。さうして儒者の爲めに攻撃せられて、「佛教は立派な教だナンと言つた所が一個の利害のみを念頭に置いて居る小人の教である、天下國家を憂ふる者の爲めには何の役にも立たないぢやないか、汝等の祈る所を大きな聲で言ふて見い、人の前では言へない事ばかり祈つては居らんか」と言はれてギヤフンと參つたやうな次第である。それは皆大きな問題の解決がついて居らん爲めにさういふ事柄が起るのであつて、あらゆる事柄に就て眞理の研究が缺けて居る、眞理の説明が缺けて居ると言

ひ得られると思ふのであります。

今お話したブラット博士が、あなた方の教の特色として宣傳に力を入れられる方面は何處にあるかといふことを尋ねられましたから、私はそれはいろ／＼あるけれども三點を以つて答へて置いたのである。第一は眞理の教としてある、その意味は如何にも深遠にして簡單には話し盡されないけれども、宗教が哲學から破られたり、人間の知識から揺ぶられるやうなことでは、將來の人を指導することは出来ない、我が教は眞理の光に於て他の宗教に超越して居るものであるといふ事が一つの根本の主張である。第二は佛教は消極、厭世、悲觀、抹香くさいといふ風に考へられて居るけれども、もと／＼さういふものではない、流れた弊害にはさういふ有様が見られるけれども、日蓮主義は全然この弊害を打破して進むもので、その信仰が現實の生活に調節し、所謂實際生活を導きこれに光あらしむるものである、家の中で臺所の隅に潜んで居る信仰ではない、家の表面に現はれて居る、決して佛壇の隅にある信仰ではなくして、家庭の全面に光を輝かし、打ち濕りたる信仰に

はあらずしてそこに快活なる奮闘の力を現はして行く所の教である。此の意味が日蓮の人格と、日蓮の教とを通して勇ましく現はれて居る點が吾々の教の特色である。今一つは教と國家との關係であるが、西洋でも歴史を通して見れば中々困難な問題であるが、佛教もやはりさういふ問題に接觸して居る、之れを適當に解決して、國を大切にすると同時に國の考の間違つた場合は之れを直す、國を重んずると同時に國を教へるといふ立場にあるものである。個人の救ひ、個人の教のみでなく、國家の方向をも指示して過ちなからしめる、國家が弱る時分には之れを助け、國家が誤らんとする時には之れを矯すといふ所に日蓮主義の尊い所があるのであるといふやうな話を致しました。大變感心したやうな顔をして居りましたが、斯様な譯であつてこの眞理の教といふものは非常な尊い意味を有つものである。唯だ世間の人が言ふやうな漠然たる意味の眞理ではない、本當の眞理、哲學的眞理、宗教的眞理、本當の眞理に於て法華經は尊い、唯だ譯もなく空な言葉で眞理々々と言つて眞理とは何だか分らんやうなシャボン玉みたやうなものを尊んで居るのは違ふ。如何な

る眞理に於てもこの教は尊い、その事を日蓮聖人の教には十分に現はされて居る。日蓮は熱烈なる慈悲の宗教家であると同時に、洵に透明なる知識の眞理の宗教家であつた、それを皆さんがお忘れなさらんやうにしなければならぬ。それ故に日蓮聖人の教の一節々々は吾々の智慧の光として尊い、唯だ有難い〜といふ情操、感情で行くばかりではない、その向ふ所を指示せられた方向が正しいといふことに於て敬服しなければならぬと思ふのである。その意味に於て佛敎學者などに於ては、逆も日蓮聖人に比較すべくもない、彼等は重大なる問題がいまだ曾て解決されて居らぬものである。

五、宇宙觀の眞理

然らば眞理の教の内容としてはどんなものかといふと、第一に宇宙觀の眞理といふことを考へなければならぬのである。この天地宇宙といふものはどういふものであるか、この眞相、意味合といふものを明かにする、そこに哲學があり宗教があるのである。この全宇

宙といふものに對する考へが起らなければ哲學も宗教も何も無い、人間と言つた所が蛆虫みたいなものである、人間は小さいけれどもこの大きな無限の世界に對しての觀察を有つて居る所が動物と違ふ所以である。所がこれは人間が考へて見ようとするけれども、中々問題が大きいものであるから能く纏りがつかない、そこで間に合せの所で好い加減にやつて置くのである。基督教のやうに「宇宙といふものは神様が造つたのだらう」といふ位のもので、「それはどうして造つた」「どうしてと言つてそんな面倒な事は言はないでも宜しい、造つた物は造つたんぢや」といふやうなことで誤魔化さうとする、それは眞理の説明とはならないのである、さういふ事は勝手にその人が言ふので所謂獨斷といふものである、人は承知せぬことを自分で極めて居るのである。この茶碗なら茶碗をコップだといふ「それは茶碗ぢやないか」「イヤ、これは日本のコップだ」斯ういふやうに事を一人決めて居る、「そんな日本のコップなんと言はないでも、茶呑茶碗と言つた方が能く判るぢやないか」「それは判るかも知らんけれども、僕は兎に角日本のコップだ」といふやう

な事を言ふのと同じ事で、その人だけは判つても他の人間には通用しないのである。神が造つたといふやうなことは、基督教を信する時に於てのみさういふ事を許すのである、何にも無い所から神様と雖も物を造るといふやうな事は出来得ないことである、さういふことを許したら眞理といふものは無い、「何も無い所からボンと出た」「どうして出た」「どうしてといふことはない、神様が造つたんぢや」さういふ事は吾々の知識が第一番に反對をすることである。所謂無をして有たらしめる、何も無い所からバツと出て來た、そんな幻術みたいなことを以つて、決して吾々の知識といふものは承知するものではない。であるからして、西洋の宗教は無論この意味に於ては眞理の研究からは直ぐに落第するものである。西洋の學問は宇宙を物質的には中々よく研究して、元素とか或は分子とか、電子とか、物質の不滅といふことは盛んに言ふけれども、精神の問題に入つた時にまごついて居るのである。一つの元素といふものはこれは始め無く終り無く存続する、然らばその中の靈といふものはどうぢや、吾々の魂といふものはどうぢやといふことになる、人間の魂と

か神様とかといふやうな人格のあるものは、どうもちよつと試験管に入らないものであるから判らない、總ての問題を研究したやうだけれども一番大事なこの靈魂といふものを研究しない、それが科學の文明の弊害となつて居る。目に見える物は何でも研究して居る、實によく一切の物柄を分析して研究するけれども、靈魂だけは分析することが出来ず、試験管に入れて顕微鏡で見ることが出来ないものであるから、それで判らぬことになつて居る、西洋學問の弊害である。随つて宇宙に就ても形に屬する物の説明は出来るけれども、靈魂に屬する所の人間とか、神様とか、大事な宗教に關する事柄は一つも判りはせぬ。判らぬものをさうは言はないで、そんなものは無いものぢやといふ、これはやはり獨斷である、判らぬものを無いものだと言つてしまふ。これはマア手ツ取ばやいかも知れぬ。「そこに僕の紙入がなかつたか、今朝忘れて行つたんだが捜して呉れないか……」少しばかり其處等を捜したけれども判らない、そこで「在りません」と言つてしまへばそれで面倒はないからといふので、横着な奥さんが何でも「在りません」と言ふ、「そこに俺の扇子があ

つたらう」「在りません」……それは一番簡単な譯ぢや。そんなものぢやから科學者といふものは非常にえらさうに言ふけれども、この大事な靈魂とか神様といふものは判らん、判らんのを横着な奥さんが「在りません」といふのと同じ事で、「靈魂は在りません」と言つて居る。「左様か」と言つて済ます二本棒の亭主はそれで済むけれども、「さう捜しもしないで無いと言つたつて仕様がな、能く捜して見ろ、昨夕は在つたぢやないか」「へー、昨夕は在りました」「昨夕在つた物が今朝無いといふのはどういふ譯だ」「それでも在りません」といふ譯だ、少しも合理的な説明ではない。靈魂に關する西洋の科學の知識といふものは、幾ら熱心に研究した大博士と雖も質問に出會うた時に於ては、今の横着な奥さんの答辯と同じ事である、そんな事で吾々の眞理を愛求する所の熱誠が誤魔化されるものでなければ、打消されるものではないのである。そんなことで好い氣になつて居るやうなことが大體彼等のだらしない證據である、自分の靈魂、自分の生命そのものを「無いものぢや」「へー、左様か」と言つてそれで済んだといふのは、ダイヤモンドの指環を

失つた位のものではない。眞に己れ自身の眞實の靈魂そのものを無いと言はれて、「ハ―左様か」と言ふて居る位人間がとぼければ、最早やあとは問題はない、それが大とぼけといふものぢや。今の文明が如何に大きな聲をして、靈魂の事などを無いとか何とか世界中で言ふた所が、それは皆氣違ひになつたと考へれば差支へない、心靜かに自分に落つて考へて見たならば、この靈魂といふものは現に此處に存在して居る、それが爲めに吾々は生きて居る、これが無いといふことになつてしまへば心も何も在りはせん、死なうが生きようが、夫婦も親子も何もあつたものではない、そんなものは夢みたいなものになつてしまふ。

それ故に宗教は世界の總ての物よりも、この一個の靈魂が更に大切であるといふことに出發するものである、或る意味から言ふたならば全世界の事柄よりも、一身一個の靈魂が大切である。併しその靈魂が働いて行く時分には親が大切、國が大切といふことになるけれども、靈魂が無いといふことになれば、モウ親も國もあつたものではない、どうでも勝

手になれといふことになつてしまふ。親も靈魂がない、自分も靈魂がない、唯だ意味も無くこの世の中に生れてフワ〜として、可愛いとか憎いとか言つてやつて居る、夢のやうなものだといふ事になる、全然夢を見て居るものであるならば、どんな面白い夢も恐ろしい夢も醒めて見れば同じものである、それを戦争などをして人を殺し合ひなどをするのは餘程詰らぬ夢を見て居るといふことになつてしまふから、さういふ事ではいかない。どうしても靈魂を基礎にして一切の事を考へて行かなければならぬ。

それであるから宇宙にはどういふ事があるかといふと、總ての物が實在である、始めて出來たものでないと同時に、滅びるものではない、在るものは皆在るのである、唯だ變化はその時〜に依つて變つて行くけれども、總ての存在する物が無い所から出て來たといふ事は許さない、隨つて在る物が無くなるといふことも許さない、一切はこれ實在である。千萬無量に變化するけれども、その變化の全體これ悉く實在の物の現はれである。七面鳥の顔が七色に變つたからと言つて、無い色が出て來るものではない。又或る一つの

色になつて居る時に、その色が無くなつた譯ではなくして、時間の變化に依つていろ／＼な色が出て来る、出て来る時その色が出来たのではない、引込んで居る時その色が無くなつた譯ではない、唯だ皮相から人間が見た時、七面鳥のとさかが黄色くなつて居るとか赤くなつて居るといふだけである、その色が現はれる時生ずるにあらず、隠るゝ時滅するものではないのである。月東天に出る時月生ずるにあらず、月西海に没する時月が無くなる譯ではない、唯だ自分が山の下に居るから山の向ふの月を見ないのであつて、この山の上にあらはれた時、『ア、月が出た』といふけれども、月は始めて生ずるにあらず又滅するものでもない。それと同じ事で一切の物は實在である、この實在といふ事が宗教の根源なのである、これが破れた時は宗教といふものは無い、殊に實在の中に生命に重きを置いて考へる時、宗教を生じて來るのである。

その生命の中に於ては互具といつて互ひに具へ合ふ所の意味合を有つところのものである、それは人間一つの靈魂の中に善もあれば悪もある、憎いといふ考へもあれば可愛い

といふ考へもある、誰でもみな持つて居る。それを分類すれば様々なる佛様のやうな心もあれば地獄のやうな心もあり、鬼のやうな心もあれば菩薩のやうな心もある。それであるから一人の人間をつかまへてそれが直ちに善人といふことも悪人といふことも出来るものではない、非常な悪を犯して女房を叩き斬つたりするやうなことをする人間でも、それはさういふ心が其處に現はれた時やり居るけれども、その中には佛と同じ精神を有つて居る。そのかはり如何に人に親切を盡し居る人間でも、その半面には鬼の精神を持たぬとは言へない、殊に女の人などは非常な優しい女であつたものが、今度怒つて非常な亂暴なことをするといふやうなことが能くある、それは何も優しい奥さんが急に變つたのではない、素と／＼裏の方にさういふ嫉妬とか憎悪の念といふものがあつて、それが起つて來るのである。そのかはり左様にして亭主の顔を掻きむしつたりし居るその時に、以前の優しい心が消えてしまつたものではない、又直き出て來る、それも極く簡単な一つの言葉で『イヤ俺が悪かつた』と言へば直ぐ優しい顔になり、『貴様何んぢや』とでも言はれれば、カツと

して腹を立てる、一言一行でどんなにでも變化して行くといふのは、その時／＼に生じ且つ滅するものでないといふ意味である。この眞理といふものは何も東洋も西洋もあつたものではない、基督教も佛教もあつたものではない、この人間の心そのものにある實在の眞理と、あらゆるものを具へて居るといふ眞理を根據にして教へたものが法華經である。法華經といつても別の事を教へて居るものではない、眞理に根據して居るものである、之れを信するも信じないもない、信じないのは馬鹿だから判らんといふことになるだけのものである。この生命の實在、この生命の中にあらゆるものを具へて居るといふ眞理は、何人と雖も頭を下げなければならぬものであるといふことになるのである。そこでその互ひに具へ合つて居る意味が、法華經では非常に詳細に説かれて、最も大事な問題としては迷へる者と覺れる者との關係に依つて、暗いと明るい、惡と善といふやうな意味でもありませんが、迷へる吾々と覺れる佛との關係がさう遠いものではない、恰かも晦日の月と十五夜の月の如く、表面から見れば一方は眞ツ暗であるし一方は圓く光つて居るけれども、月の

本體に違ひのないが如き有様のものであるといふ意味を明かにした。この宇宙の實相より説き起して、さうして生命の存在に及び、生命の中に一切を具することを教へ、具する中に迷ひと覺りとの關係を解決して進んで行くところに法華經の眞理の教といふものはあるのである。これは阿彌陀經や基督教などには斯ういふ點は少しもない、これは哲學者が本當に研究をして行くならば、多大の興味を以つて進むことが出来る問題である。それはモット／＼人間の文化が進まなければ、この法華經の有難さは判りはせん、中々五百年や千年では西洋の人間が俄かに哲學者にはなれないが、併し今よりは人間は賢くなるだらう、さうして宗教と雖も眞理に根據しなければならぬといふ事ぐらゐは考へて來るだらうと思ふのであります。

六、人身觀の眞理

それからモウ一つ考へなければならぬのは人身觀の眞理でありまして、即ち人間そのも

のに就て考へることである。今までお話しした中にも自から關係を有つ譯でありませんが、殊にその大事な點は人間そのものと佛様と、又この宇宙の實相との關係に於て、部分的の小さく現はれて居る人間と、全體的の宇宙との關係に於て、それはさう離れて居るものではないのである。恰も海の波と水との關係のやうなものであつて、波が或は高く或は低くうねつて居る、「これは波だ」とけふけれども、この波といふものは海の水を離れて居るものではないのであつて、澤山の水がうねつて居ることがこれが波である。泡といふものは小さく飛ぶけれども、その泡もやはり海の水ナンである、この泡も海の水であり、この波も海の水であつて、これは全體とやはり繋がつて現はれて居るものである。今吾々人間の生活といふものは泡のやうなものである、或は波のやうなものであるといふけれども、併しその下にはこの海の水全體といふものと離れずしてこゝに現はれて居るのである。これが人間といふものを切離して飛んで居るものではない、この大きな宇宙の實在のそこに根ざしたる中に現はれて居る。他の言葉を以つていふたならば、身體中の血の現はれが一つ

の腫物なら腫物になつて現はれて来る、その小さな腫物といふものは、身體全體の血が關係して腫れあがつて居るやうなものであつて、人間といふものが現はれて居るのもそれだけが自分ではないのである、この宇宙全體と關係してこゝに人間といふものが出て居る、この儘にして全體といふものと離れて居ないものである。それは擴がりの方から言へば斯うであるし、時間の方からいうてもさういふものである、時間がズツと過去に續き未來に續いて行くところのその悠久なる無限の時間の間に、そこに現在の時間といふものがある、これは過去から續きさうして又未來に續いて行くのであるから、この現在の一瞬間の時間といふものも、過去と離れて存在せず、未來と離れて存在するものではない、ズツと續いて居るところの存在である。今夜の月がこゝに出て居るとしても、この月は唯だ今夜の月ではない、過去無限の昔から出て居る月であり、又永遠の後も出て来る月がこゝに出て居るのである、「この月は今夜の月だ」といふけれども昨日の月でもあり去年の月でもあり、さうして來年の月でもある、今夜現はれて直きの間に引込んでしまつた、二時間の月

だといふけれども、その二時間の月は二時間の月ではない、これが永遠の月であるといふ事を考へなければならぬ。人間の生命といふものも表に現はれて居る所だけ見れば、如何にも短かい丁度いまの二時間の月のやうなものだけれども、その裏面から眺めたならばこの生命は即ち永遠に存続して居る所の生命ナンである、この以外に永遠といふものはない。さういふ意味合を非常に能く教へられることに依つて、自分に非常な確かな信念といふものが起つて来るのである、自分が滅びないといふ意味合も、時間に於て永遠の存在であり、又その働きに於て小さいものではない、全體に通うて行くべきものである、往いてはこれが佛教になる作用といふものを有つのである、それだけの値打があるのである、叩けば佛に成ることが出来るのである。斯ういふ永遠の存在性が無い、無限の活動性が無いものだといふことになれば、幾ら努力してもどうしても佛様に成りやうがない。だから自分は非常な尊い者である、普通の人が考へるやうに惱んで生れて苦んでくたばつて行くといふやうなものではない、それは表面の現はれを見ればさうであるけれども、この我が生命

にかへつたならば永遠の存在であつて、その中には非常に尊いものがある、これは磨きように依つては佛様にも成るものぢやといふ眞理の證明があつて、「或る程」といふことを了解するのが法華經の教である、誤魔化して安心を與へるのではない、眞理の上から了解を與へて、そこに本當の有難さが出て来るのである。

そこでこれは二つの側を人身觀に於ては考へなければならぬ、斯ういふ風に自然に具へて居るところの關係、即ち自然的の關係と言ひますか、それが一つの側をなすのである。即ち迷ひと悟りとの關係が自然的の側に於て離れない意味があるのである、之れを結びつけて貫はなかつたならば、迷ひは永遠の迷ひ、悟りは永遠の悟り、その間が切れてしまつたならば、吾々成佛することも幸福を得ることも出来ない。けれども今は迷うて居るがその半面にはちやんと悟りといふものを結びついて居るところの自然的關係といふものがある、自然的關係といふのはどういふ譯かと言つたならば、何も自分でどうといふことを考へないでも、人間の心、それは永遠に存在するものである、存在したくないと言つても存

在するのである、滅びないさういふ自然の状態を有つて居る、さうして一切の物を具へて居るのである。無くなさうとして無くすことは出来ない、『俺は佛などは嫌ひぢや、そんな親切な了簡などは嫌ひぢや、一生親切などは起さない』と言つて親切を取盡さうとしても、人間の精神からさういふ親切の精神を除き去ることは出来ない。自分はモウ一生怒つて／＼怒り通してやらうと思つて、女の人などが何かの一身上の出来事の爲めに、モウ決して一生涯笑ふまいと誓つてさうして鬼のやうな悪魔のやうな精神を持つて居つても、そこに自分に對して非常に優しいことをして呉れる人があつたならば——例へば自分が非常に腹が減つて居る、鬼のやうな怖い顔をして腹ペコ／＼で居る時に、綺麗な婦人が来て、『あなた怖い顔をして居るけれども、腹が減つて居るのでせう、サアこの握飯をお食んなさい』といふことになれば、どうしてもそれを喰はずには居られない、さういふ時には『ア本當に親切な人だな』……直きにそこに佛性の閃といふものが出て来る。あなた方にして多少さういふ風な御経験はあるだらうと思ふ、何か癩に觸ることがあつてブン／＼

腹を立て、居る、そこに子供なら子供が無邪氣な顔をして『お母アちゃん』と言つてやつて来る、つい今迄の腹立つた精神も消え去つてしまふ、それは一方に自分の心の中にさういふものがあるのであつて、それは自然に有つて居るものであるから、除かうとして除くことの出来ないものである。そこに非常な又尊い頼みになる所があるのである、吾々はさういふ尊き生命、尊き本體を有つ、何者も之れを代へることも奪ふことも出来ないものであるといふ眞理に徹底して、さうして吾々の信仰の基礎は築かれて居るものである。所がモウ一面の側に於て尊い意味合がある、それは吾々の心にさういふ善良な性質があり、絶えず向上せんとする性質があること故に、どうしてもそれが覺醒るのである、如何に抑へようとしてもそれが覺醒めて佛さまの方に向いて行くやうな氣分が起る。佛に向くといふことは佛を信するばかりではない、人間が善心を起し善を行ふ精神は、親に歸らんとして居るものである、親即ち佛の心に似て居る所があるからして、人間が左様な善を行ふ譯である。それは一生惡を以つて貫かうとしても貫くことの出来ない人間の本性といふ

ものがある、寧ろどつちかと言つたならば左様な決心をする者が特別ナンである、一生悪い事をし通してやらう、如何に善心が起つても引込めといふやうなことを決心して居る者は先づ少ないのである。人間はどうか能ふべくば善い事を考へ、善い事をして行かうと考へて居るものである、唯だいろくの事情に依つてそれを振り亂されることはあるけれども、『汝の志を言へ』といはれたならば『私は一生怒り續けて悪い事をして行かう』といふやうなことを言ふ者は一人も無い、『成るべく善い事を餘計して悪い事の少ないやうに考へて居ります、けれども思ふ様に参らぬことを遺憾とします』といふことが先づ萬人共通の志であらうと思ふ。それ程に人間といふものは向上精神を有つて居る、その向上性が最も鮮かに現はれて来る時宗教の信仰となつて、子が父を思ふが如く、國民の皇室を思ふが如くに、法華經で言ふ本佛に對して吾々が信仰の心を捧げ、さうして渴仰の精神が現はれて行くのである、その宗教心なるものは最も美しい人間の精神の現はれである。その場合に上の方から、左様な人間があれば無論之れを助けて、さうでなくてさへも親

が子を思ふが如き精神を以つて本佛は一切衆生を救ひたいと思つてお居でになること故に左様な發心——信仰に向いた時には非常な喜びを以つてこれに對はれる。そこに佛の方から来る所の強い救ひの力と、吾々の渴仰して行く信念の力が結びついて、親は子を思ひ子は親を思つて、丁度親子が久し振に選り合つて『ア、お前だつたか』『私はあなたに會ひたうございました』といふやうな、燃ゆるが如き情操が結びつく所に宗教信念といふものがあつて、それが本になつていろくの善い事が之れを助けて、人間の向上して行く力といふものを生じて来るのである、之れを精神的の關係といふのである。吾々の佛を思ふ向上しようとする所の精神と、上から之れを救ひなさうとする所の精神との關係、即ち精神的の關係である。必然的に佛と吾々とは體を同じふする上に、上からは救はう、吾々は上らうとする所の精神的關係といふものがある、この自然的關係と精神的關係の二つの關係を以つて、遂に吾々は佛様に成つて行くことが出来るのである。その事はこの間ブラット博士が來た時分にも『あなた方この教を信する者は如何にして佛と成り得るか』といふ

問題を質問された時に、『自然的關係としてはその性を同じふし、精神的關係としては本佛の慈悲と吾々の渴仰との接觸、それを本にしてあらゆる善を培うて遂に佛に成るものぢや』といふことを簡單に説明した所が、これも首肯して居つたのであります。これが法華經の眞理として非常に完備して居る所の教であることを私は信するのである。

七、佛身觀の眞理

いま一つは佛身觀の眞理でありまして、他の宗教では神といひ佛といふことに就て、本當の實在の意味が眞理的に説明されて居ないし、さうしてその働きのやはり多神主義のものとは分裂してしまつて居るし、一神主義のものは孤立に終つて居るし、本佛のやうに本一つにして働きの無限であるといふ統一神論の意味合といふものは、世界の宗教中に於て法華經壽量品を除いて他に無いと日蓮聖人が言はれた程の尊い事である。これもプラト博士との話の間にその事が出た時に、その點に就ては様々な質問を發せられた、大體了解し

たやうであります。非常にそれに就ては愉快な質問を連發して、流石は二十年も大學の教授をして佛敎の講座を擔任して居る人だけあつて、その注意の點が違ふと思つて、私は轉た尊敬の念を生じた譯でありました。我國の佛敎徒には私が多年この大事な點に就て論究を試みても、左程に感ずる者が無くして質問を發する者もない、洵にだらしない者が多いことを私は遺憾に考へて居るのであります。本當に世界にこの佛の敎を弘めて行かうとするに就ては、この佛身觀を明かにしませんければ、敎の値打といふものは立つものではない。それが法華經並に日蓮聖人の敎といふものは、佛身觀に於て實に異彩を放つて居る、さうしてそれがやはり前にいふ智慧と慈悲との上に於て又働きの上に於て、さうしてその救ひが死後ばかりでなく現在生活の光となり、併せて永遠まで導いて行く上に於て、あらゆる佛様の智慧の有様も、慈悲の有様も、働きの有様も、完全圓滿、申分の無い意味合に於て現はれて居るのである、斯ういふ有難い、斯ういふ尊い活きた所のお方があらうかといふ意味に於て、一切の宗教を超越して完全に説明されて居るものである。それが殊

に感情的でなく、真理の意味合を以て一々立證して進んだことであります。それは自分勝手に斯ういふものぢや、ア、いふものぢやと言つて、好い加減に都合のよいことを迷信の輩が説明するやうに、嘘八百をならべ立てるやうなことは勝手に言へるのでありますけれども、法華經と日蓮の教はさういふ獨斷的な、さういふ不合理なものではないのであります、一つ／＼真理の證明に基いて、而かも完全に之れを説明し了ることに於て、流石は本化上行の再身日蓮聖人である、流石は一切經中最爲第一の法華經であると肯かれる次第であらうと考へます。

さういふ點は無論一席の講話を以つて完全に了解し得る事柄ではありませんけれども、臆氣ながらさういふ意味合だナといふことが、そこに匂ひが残つただけでも、今度は單純な信仰のやうでも、同じ單純でもさういふ強味を有つた所の信仰であつたならば、非常に結果が違つて現はれて來るのではなからうかと思ふ次第であります。

先づこの三つの點に於て真理が明かになれば、その他の問題に就ても自から眞理的の解

釋をするものだといふことを了解して置かなければならぬのであります。序に申して置くのは、斯ういふ宗教が一番大事な問題として起つて來るのはやはり道德との關係である、斯様にして打立て、行く所の眞理および信仰が、吾々の道德行爲にどういふ影響を與へるかといふ問題である。それは項を別にして更に申上げたいと考へて居りますが、尙ほその道德問題の中から自然に起つて來るのが國家的道德と宗教的道德といふか、或は個人的、或は世界的、或は未來的のやうな觀念と國家意識に基いたる道德との關係であります。之れを解決しなければ、信心する者は教の方に氣を取られてしまつて、例へば宗教を信するから日本の國家の事などはどうでも宜いといふ風に考へたり、個人の立場から考へて「こんな有難い教が又とあるものか、之れを彼是いふやうな國家もへちまもあるものか」といふやうに考へたり、例へば大本教のやうな信者はそれに心酔する結果、國家の法律を以つて大本教の不都合な事を制裁すれば、信者は益々國家を呪ふやうなことをやつて居る、王仁三郎が滿洲に行つて馬賊の親方になつてどうかいふやうな話が新聞に見えて居るが、

ア、いふ者が殖えて行つて『ナニニ日本もへちまもあるものか、忌々しいから一つ馬賊の中に入つてやつてやらう』といふやうなさういふ宗教。或は又『モウこの世はどうでも宜い、死んだ先きぢや』と言つて國家が危急存亡に瀕しても、『どうせ日本の國はモウ亡びるだらう、早くマア亡びない中に死んだ方が宜からう』といふやうなことで、皆が氣が抜けたやうになつてナンマイダーノといふやうになつても仕方がない。又人類愛を骨張して、世界は人類愛を以つて平等であるといふやうな、口先ばかりうまいことを言つて、日本人を『平等ぢや』『平和ぢや』と言つて引張つて置いて、一面に於ては日本を排斥し、さうして日本の國家を侮辱するのみでなく、侮辱はこれ即ち出發點である、この侮辱の次に來るものは日本の國を叩きつける、極端に言へば日本の國を滅すといふことになるけれども、滅すまでいかんでも足腰の立たぬ脆弱な國家として、何にも文句は言はぬやうに、どうか斯うかお粥をすゝつて生きて行けば宜いと思つて居ろといふことにまで叩き込まうとして現はれて居る所のこの侮辱の態度に對して、憤激する精神もなければそれに

備へる決心もなくしてフワ／＼やつて行く。愈々さういふ時代に遭遇したならば『これはえらい事になつた』と言つて泣面をかいて『併ながら宗教はそんな事は構ひはせぬ、イヤさうなつた所が亞米利加は信教自由の憲法を尊重するだらう、日本の今よりもモツと尊重するから、何も吾々の信仰に關係はあるまい、國家はどうなつても自分の信仰は大丈夫ぢや』といふやうなことに宗教といふものは成り易いものである、多くの宗教はさういふ大事な所に缺陷を持つものである。本當の佛教、日蓮の解釋するこの主義に於ては、殊に國家の道徳と吾々の信仰との間が非常に能く解釋されて居る。お經としては法華部の中の大薩遮經としてこれが現はれ、日蓮の遺訓としては立正安國論として現はれて、この信仰と國家意識といふものを結合し、適當なる方針を與へたといふことは、實に宗教に於ては全世界にその類例を見ない所の尊さを有つものであります。これは日蓮門下が自覺するといふよりは國民が自覺し、政治家が自覺し、國家を念とする者が一日も早く自覺しなければ宗教なら何でも宜いといふやうな茫漠たる觀念を有つて居るやうな事では、他日如何なる

悔を残すかも知らん。信教の自由は人民の権利として保障するにしても、どういふ意味の宗教が盛んになる事が國家の爲めに有利であるかといふ位の事は考へて置かなければならぬと思ふ。甚だその點に於て考へるの乏しい人が多いやうに思はれるし、さういふ意味合の事は大した重い事でもないかの如くに考へて居る學者達も多いやうであるけれども、これは洵に痛嘆に堪へないことだと私は考へて居る。

尙ほ宗教が戦争といふ事に就て意見を決めなければならぬのである。多くの場合宗教は戦争に反對をする、無論むやみに戦争をやるといふことは宜くないことに違ひない、けれども國家の面目といふものを尊重する場合には、國家の獨立を擁護するには時に戦争は避くべからざるものである。戦争は人を殺すことであるけれども、それは罪惡ではなくして國家の功勞であるが如くに、それは宗教に於ても必しも罪のみとは認めてはならない、國家から言ふたならば勳章を貰うて居る功勞者が、教の方からは人を殺して來たのだから地獄に墮ちる、お經を讀んで貰へといふやうな、國家的道德と宗教的道德が矛盾した状態に

在るといふやうな事になつたならば、それは由々しき大事である。この事は他の教に於ては解決がついて居らない、どの教にも「教と戦争」、「教と國家の關係」を解決するものはない、それが今申した法華部の中の大薩遮經と、佛敎徒の中に於ける日蓮の立正安國論とは、公明に之れを解決して向ふ所を教へたものであります。

さういふ意味合が道德問題の中にも特に注意して研究をしなければならぬ事である、これは項を改めてお話ししたいと思ふが併しそれがやはり眞理の光である。さういふ大問題、道德上の問題をも解決するといふのは、智慧の光、眞理の光である、それがなければ解決は出来ないのである、道德は道德だけ獨立するものではない、知識を以つて研究せられてその道德の善惡といふものが判断せられるので、馬鹿であつては如何なる善人にならうと思つても碌な人間にはなれない、本當の善人になるには知識といふものが一方に光つて居なければならぬ。道德は善い事さへすれが宜いと言つても、知識の研究に缺けたる道德は本當の善い事は出来ない、善いと思つて詰らぬ事をやることになる。

モウ一つは宗教に伴ふところの迷信の事であるが、これは範圍の廣いことであるが、縮めて言へば眞理を輕んじて起る宗教は悉く迷信と言はれても仕方がないのである。眞理に根據しないものは嚴密なる意味に於ては、非常な立派な組織立つたる宗教と雖も、眞理の標準から判断せられたとき迷信である。それであるから迷信の區域の分け方は、いろ／＼緩やかに分けるのと嚴密に分けるとで非常に範圍が違ふ。併ながら本當は最後の文化の批判する所は、眞理に根據せずして好い加減な事をいふ者は、立派に見えても迷信だと断定せられることは、免れることの出来ない絶對絶命の運命であつて、これは大いに宗教家の考へを及さなければならぬ所である。さういふ場合には今まで迷信でないとして許されたものも、最後純潔なる眞理の標準から迷信の宣告を受けたる時、その時に残つて眞理の引立を受くる教となるべきものは、これ即ち日蓮の教、法華經の教といふことになる。さういふ大使命を帯びて居るものぢやといふ事を考へて置いて、あなた方自身の研究せられることを無論希望するけれども、自身で出来なくてもあなた方には立派な男子もあり又女

子もあり、幾らでも産むことも出来るし、早や産んでも居られるだらうから、さういふ人に對つて、「同じく信仰をするならば眞理の教でなければいかん、母は學問足らずして眞理の光を眺めて進むことが出来なかつたけれども、吾が信仰は法華經に因り日蓮聖人に據つて居ることに依つて、世界第一の眞理の教である、汝は年若うして眞理の研究をする餘地がある、先づ信心は定めて置くが宜いけれども、その信仰の基礎は眞理に於て秀でて居るといふことに悦びを持ってよ、さうしてそれを味ふだけの研究をも併せてするが宜い」といふことを以つて、あなた方の子孫に傳へてお居でになることが大事である。

所で日本は非常に合理的だの眞理だのといふけれども、宗教の研究に對する眞理の光は非常に微弱なものである、下らないことを間に合せで今までやつて居るけれども、段々日本も文化が進んで來ますれば、只今私が申して居るやうなことが一般の國民の問題にならなければならぬ、何時までも柴又の帝釋さまや、成田のお不動さんであつてはならない。どうしても日本の文化がもつと進んでいかなければ、百年経つても二百年経つてもお不動

さまと帝釋さまといふやうなことでは、世界を對手にして戦ふことは出来ない。今後は如何なる苦しい場合に於ても負けてはいかぬ、經濟に於ても負けてはいかぬ、學問に於ても宗教に於ても、國民の體格に於ても、あらゆる點に於て負けてはならぬ。負けたならば日本民族といふものは粉碎されてしまふ、彼等はどうしても日本民族を打倒しなければ熄まない、さうして亞細亞の利權を奪らうと考へて居るものである。これは一週や二週の戦争の問題ではない、假りに一週戦争に勝つたからと言つて、それで彼等は止めるものではない、この間負けたから今度こそは負けぬやうにといふのでやつて来る。さうなつたら逃げる譯には行かん、それなら今から頭を下げてしまつたら勘忍へて呉れるかといふと、頭を下れば根こそぎやつて来る、どうしても斯うしても仕方がない。これは國民各々が本當の決心をしてかゝるより外はない、それを貫いて行くには先づ信仰を興へて、さうして日蓮聖人の立正安國の精神を以つて國民を鍛へ上げて、本當の日本人を造つて置くことが、吾々の先祖に對する御恩報じであり、それが吾々の子孫に傳へる所の幸福の根本である。

この故に日蓮主義は力強い運動を起して行かなければならぬ秋に際會して居るのである、あなた方はこの教の下に近づかれた緣故があるのであるから、人にその力が興へられなければ自分だけでもこの信仰を以つて自分を強い日本人にして、如何なる事になつてもこの日本の國がやられるやうなことをないやうに、それは戦争ばかりではない、經濟の事も、學問の事も、宗教の事も、總ての點に於て日本が後れを取らぬやうに、さうすれば何も怖いことはない。日本の國には使命があり天職がある、日本民族は斯様なことに依つてやられる國民ではない、幾度も今まで斯ういふ國難に遭遇したけれども、吾々の先祖は皆之れを切抜けて來た、『今度ばかりは逆も仕方がありません』と言つてへこ垂れるやうなことでは、大和魂といふものはない。

さうしてその強い決心をして進むことを愉快に考へなければならぬものだと思ふ。日蓮聖人はあらゆる迫害の中に立つて益々愉快を増し悦びを増して、法華經の御爲めに流されたのはこんな有難いことはない、頸の座に坐つても『これほどの悦びを笑へかし』と言

つて、その困難を意としないのみならず、そこに法悦の力を現はすことに於て始めて信仰の威力といふものがあるのである。サアこれはえらいことになつて来たといふ時にも、そのえらい所を忍ぶ力を養成して、どうせ人間といふものは最後は死んで行くものだけれども、生きて居る間は強い力を充實せしめて、何なりとも立派な仕事を残し、さうしてその魂を自分の子供に打込んで、この大日本帝國をして何處までも榮えしめなければならぬ、これが大和民族の根本の使命である。そこに信仰があり、そこに大きな精神があり、それを引立て、居るものが日蓮聖人である。所が今日は日蓮門下が却つて自覺して居らぬので、この間國技館に於て開かれた國民大會に於て、二十人ばかり出た多勢の辯士の中には、敢へて日蓮聖人を信じて居ない人でも、口を開けば聖日蓮を思ふとか、日蓮聖人の時代と今日は同じことであると言つて、日蓮聖人の名を呼ぶ者が幾人あつたかわからない、これは當然の事である。一昨日ですか浄土宗の芝中學校に於て辯論會があつたさうであります、その時に、浄土宗と日蓮宗は「念佛無間」の關係などで、一番仲が悪いと言はれて

居るが、その浄土宗の學校に於て「今日の秋に際會しては偉人日蓮を思はざるを得ぬ」と言つて演説をした者があると言つて、芝中學校の中學生が歸つて来て話して居つた、「あれは浄土宗の學校だと思つたら盛んに日蓮聖人を言うて居る、妙な事になりました」と言つて中學校の四年生が言つて居る。それ程世間なり他の宗派でも日蓮聖人を追懐すの秋に當つて、日蓮聖人を戴いて居る門下僧俗がそこに覺醒んといふことでは、非常な申譯の無いことだと私は考へるのである。近き將來に於て日蓮教徒大會を東京に開いて、全國の日蓮門下の一大覺醒を促さんければ吾々の使命が済まぬと考へて居るので、近く全國的に私がか今申上げたやうな意味合を發揚して見たいと思ふて居る譯であります。

八、結 論

どうぞあなた方は、あなた方の家庭に於て、日蓮聖人を戴いて居る者は、普通の國民とは違ふぞ、普通の國民は無自覺にあつても、題目を唱へる者はこの國家の大事の場合に於

て適當な自覺を持つといふことで一つやつて戴かんければ、唯だお題目は唱へるけれども木魚ボク／＼だといふやうな事ではいかぬ。苟もお題目を唱へ日蓮を師と頼む以上に於ては、模範的日本國民とならなければいかぬ、日蓮の信者は模範的國民である、唯だ信者の仲間にて、念佛の信者や天理教の信者に比べてはこつちの方がちつと宜しいといふやうな事ではいかぬ、そんな間違つた者の仲間にて少しばかり上等な位ではいかぬ、本當の國民の模範を以つて任するだけの堅い決心を持たなければならぬ。

どうかさういふ意味に於てこの決心を固め、そこに面白味を感じて行かなければ人間として生れた甲斐がなからうと思ふ。若しこれ位のことでは『これはえらい事になつて来た』と思つて腰を抜かすやうならば、鎌倉當年の日蓮に随つて居つたならばどうであるか。弟子は土の牢に入れられ、信者もいろ／＼な迫害を受ける、『あゝ大變だ、だから妾が言はぬことぢやない、家の旦那も引張られては大變だ、早く今のうちに珠數を切つて置け』といふやうな譯になる、そんなことでは日蓮教徒たるの光榮を擔ふことは出来ない。今日露

西亞との間にどんな問題が起つて来るにしても、鎌倉當時の政府が非常な壓迫を加へた日蓮の門下の状態を思ふたならば、まさか今日は土の牢に抛り込まれる心配はない譯であるから、本當の勇ましい決心を持つてこの信仰を勵んでお出でになることを希望する次第であります。

如來は是れ天中の天なり、若し般涅槃して悉く磨滅せば、世間應に滅すべし、若し滅せざれば則ち常住安樂なり、常住安樂なれば則ち必ず我あり、煙あらば火あるが如し、若し復無我にして而も有我ならば、世間應に瞞すべし、實には有我にして無我にあらず、亦壞せず、若し實に無我ならば、我は則ち成せず。

汝須く一身の安堵を思はば、先づ四表の靜謐を禱るべきものか。就中人の世に在る、各後生を恐る。是を以て或は邪教を信じ、或は謗法を貴ぶ。各是非に迷ふを惡むと雖も、而も猶佛法に歸することを哀む。何ぞ同じく信心の力を以てせば、妄りに邪義の詞を宗めんや。若し執心翻らず、亦曲意猶存せば、早く有爲の郷を辭して必ず無間の獄に墮せん。……汝早く信仰の寸心を改めて、速かに實乗の一善に歸せよ。然れば則ち三界皆佛國なり、佛國其れ衰へんや。十方悉く寶土なり、寶土何ぞ壞れんや。國に衰微なく、土に破壊なくんば、身は是れ安全、心は是れ禪定ならん。此詞此言信すべく、崇むべし。

——日蓮聖人 立正安國論——

昭和十一年五月八日印刷
昭和十一年五月十二日發行

定價金拾五錢

不許複製

編輯兼
發行者

東京市小石川區音羽町六丁目十七番地

磯部滿事

印刷者

東京市品川區南品川二丁目一八一番地

大辻松太郎

印刷所

東京市品川區南品川二丁目一八一番地

都印刷所

電話馬輪四六〇二四番

東京市小石川區音羽町六丁目十七番地

發行所

財團
法人 統

一

團

播磨座東京九四二〇番
電話牛込五三三六番

終

